

附 編

半 田 山 城 測 量 後 記

土 井 基 司

はじめに

半田山城は、半田山山塊の西寄り山頂、標高136mに立地する。『岡山市史』⁽¹⁾や『日本城郭大系』⁽²⁾などでわずかにその概要が紹介されているだけで、本格的な調査の手は全く入っていなかった。そうしたなかで、岡山大学埋蔵文化財調査研究センターでは、1989年度の「都市近郊林(半田山)の自然特性およびその環境保全機能に関する研究」の一環として、半田山城の測量調査を実施することになり、センター職員が中心となり調査した。調査は石坂俊郎が担当し、成果報告も石坂が執筆した。ここではその成果に基づいて、関連する資料(遺跡、文献、地名)を総合的に検討しながら、半田山城をめぐるいくつかの問題点を提起したい。

測量成果(図1)

測量成果は一応報告されているが、大学内部向けの報告書という性格が強いので、ここで改めてもう1度報告しておきたい。内容は、石坂の報告に全面的に依存し、部分的に要約するにとどめた。

基本形態は、東西方向に展開する連郭式山城である。郭ごとに順次説明する。

山頂を取り込む形で最高部に主郭を置く。東西55m、南北30mの矩形で、山頂はそのほぼ中心にあっている。山頂周辺は約20m四方が一段高くなっているようにも見え、削平が徹底しなかったためかもしれないが、城内の中心的施設が存在した可能性もある。南東部分は、北東方向から進入する林道によって変形している。

主郭の東側に、一段下がって東第1郭(仮称)を設ける。南辺を林道に破壊されているため正確な規模は不明だが、東辺14m、西辺26m、東西幅14mほどの台形だろう。主郭との標高差は約4mである。斜面を削りだした結果、東辺部直下、標高差4mでも幅4mほどの平坦面と、その東縁にごく低平ながら土塁状の高まりが認められる。ただし北から進入する山道と重複しており、本来どおりの形状とは断定できない。

主郭の西には2.5m下がって西第1郭(仮称)が隣接する。東辺38m、西辺29m、東西幅13mの台形である。主郭から西第1郭へは、現在、舌状のスロープが張りだしているが、西第1郭から西接する西第2郭(仮称)へも同じ状況にあり、廃城後、後世改変されたものとみておきたい。

西第1郭から西へ2m下がって西第2郭、さらにその北西部と重複する形で、数10cm下がっ

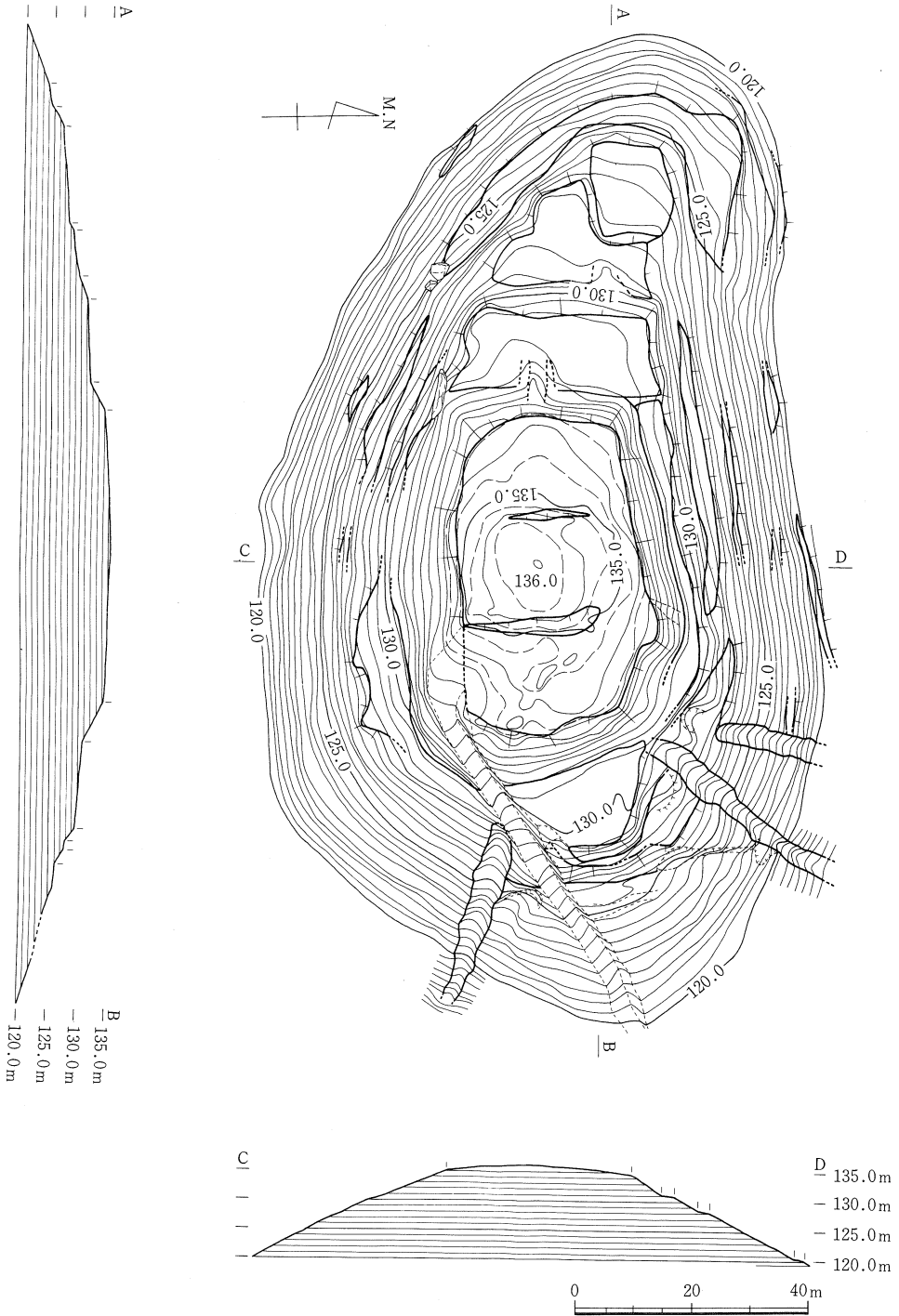


図1 半田山城跡測量図 (縮尺1/1200) 註(3)文献より

て西第3郭(仮称)が展開する。西第2郭は東辺27m、西第3郭を除く西辺10m、東西幅17m。西第3郭は西第2郭との標高差がわずかだが、東西15m、南北13mの方形に見え、一応分けておく。

西第2郭・西第3郭の下方には、東を除く三方を囲む腰曲輪が設けられる。上方からの崩落土が堆積しているため、明確なラインは断定しがたいが、本来、幅5～6m、上方との標高差2.5m前後と思われる。

主郭の南・北斜面には、最低2段の犬走り状のテラスが認められる。比較的明らかな北斜面でみると、上段は131m付近で、幅2～5m、主郭との標高差3m。下段は標高128m付近で、幅2～3m、上段との標高差2.5m。南斜面は崩落がはげしいが、上段が標高129～130m付近に、下段は西寄りに一部だが、標高127m付近に認められる。上段と主郭との標高差4.5～5m、東半はやや幅が広く、腰曲輪の可能性もある。東・西第1郭と南・北上段テラスはそれぞれほぼ同じレベルに位置する。その他にも、標高120m付近などに断片的に平坦面が認められる。

郭以外の施設として、東第1郭周辺で3条の堅堀が確認された。幅3～5m、いずれも上端は標高129m付近に達し、北斜面西側のものは標高120m、同東側のものは117m、南東斜面のものも117m付近まで下がっている。標高差12m前後である。

以上、半田山城は、東西長140m、南北幅70m以上、各郭が主郭を頂上に稜線上に並ぶ連郭式山城である。堅堀は3条認められたが、堀切、土塁は確認されなかった。角礫が各所に散在するものの石垣は認められなかった。虎口、井戸などの諸施設も不明である。踏査の結果、城の南斜面、標高120mを下った辺りから、堅堀状の遺構が1条延々と下っているのが確認されたが、城に伴うものかは確かでない。

津島周辺の中世遺跡 (図2)

半田山城の歴史的背景を理解するために、まず『岡山市埋蔵文化財分布地図』をもとにして、半田山周辺の中世の遺跡について説明する。

はじめに城郭から述べたい。ほとんどが山城だが、半田山周辺の城の分布密度はかなり高い。後にふれるように、中世山陽道が通い交通の要衝である、旭川西岸の肥沃な沖積地をひかえている、戦国時代後期、松田氏、後には三村・毛利氏対浦上・宇喜多氏の勢力争いの主な舞台となった、等の要因が考えられる。

龍ノ口山城、船山城、妙見山城、半田山城、烏山城、蜂矢城、山崎城などが中世山陽道沿いに立地している。龍ノ口山城をめぐる戦いは数度にわたって行なわれており、また、明禅寺山城の攻防を中心とした「明禅寺合戦」は、備前における宇喜多直家の覇権が確立した戦いとして有名である。しかし、発掘調査などによってその実態の一部でも明らかになっているのは、⁽⁴⁾富山城ぐらいしかない。



図2 遺跡分布地図 (縮尺1/75000)
(国土地理院1/50000 岡山北部・南部を縮小)

- 1 龍ノ口山城(戦国) 2 船山城(戦国) 3 妙見山城(戦国) 4 半田山城(戦国) 5 烏山城(戦国)
- 6 蜂矢城(戦国) 7 山崎城(戦国) 8 富山城(戦国) 9 高柳 10 城跡 11 岡山城(戦国～江戸)
- 12 妙禪寺城(戦国) 13 金山寺 14 寺院跡(室町) 15 堂敷山廃寺(中世) 16 清水廃寺(中世)
- 17 堂屋敷廃寺(平安～中世) 18 常円寺跡? 19 妙善寺(福輪寺?) 20 石井廃寺(奈良～中世)
- 21 賞田廃寺(飛鳥～中世) 22 幡多廃寺(奈良～中世) 23 散布地(古墳・中世) 24 散布地(古墳～中世)
- 25 散布地(中世) 26 首塚(中世?) 27 鹿田遺跡(弥生～江戸) 28 二日市遺跡(弥生～江戸) 29 散布地(古墳・中世)
- 30 備前国庁跡(古代～中世) 31 国府遺跡(古墳後期～中世) 32 操山202号遺跡(貝塚, 平安～中世)
- 33 大塚山経塚(中世) 34 操山205号, 206号遺跡(貝塚, 古代～中世) 35 円山1号～5号貝塚 36 「城」字名所在地

城郭以外では、寺院跡が多いのが目立つ。中でも金山寺は、「金山寺文書」という豊富な古文書が残り、岡山の中世史を考えるうえでの貴重な資料となっている。また、半田山南山麓には、福輪寺と呼ばれる寺があったと伝えられ、『源平盛衰記』や『平家物語』に、「福輪寺阡」あるいは「福隆寺縄手」としてその名があらわれる⁽⁵⁾。伝承では福輪寺が日蓮宗に改宗して妙善寺になったという。妙善寺は松田氏の強い保護を受けた寺だが、江戸時代にいったん断絶し、明治になって現在地に復興した。そこが元来の所在地かははっきりしない。常円寺は宅地開発で地形が大きく改変を受け、地名からしかその存在を窺えない。

中世の御野郡南部、旭川西岸のデルタ地域には、古代からつづく鹿田庄をはじめ多くの荘園が存在していた。荘園の様子が知れるような遺跡は、現在のところ、岡山大学鹿田キャンパス所在の鹿田遺跡⁽⁶⁾や、二日市遺跡⁽⁷⁾しか見つかっておらず、考古学的にその実態を復元するまでにはいたっていない。

その他に、岡山大学津島キャンパスでは発掘調査が数地点で行なわれており、中世の水田跡が確認されている⁽⁸⁾。中世の津島村は基本的には農村だったと考えられる。

以上のように、周辺に多くの遺跡が存在するにもかかわらず、中世の御野郡の様子は不明な点が多く、考古学からみた、開発領主とその支配拠点としての居館、山城との関係は全くといっていいほどわかっていない。

文献上の中世津島周辺

中世の津島付近について様子がわかる史料はほとんどない。わずかに軍記物語のようなものがあるだけである。

①『源平盛衰記』『平家物語』

対象時期より少し古いが、『源平盛衰記』や『平家物語』にこの辺りについての記述がある。その概略を説明しよう。備中国の出身で、平家の家人であった妹尾兼康は、倶利伽羅峠の戦いで破れ、木曾義仲軍の捕虜となった。やがて義仲は京より平家を追い落とし、平家は屋島に逃れた。義仲はそれを追撃しようと備前方面に出陣したが、その時兼康は先陣の案内役を申し出て許された。ところが、これは兼康の謀略で、彼は途中、藤野で監視役を切り殺して遁走した。怒った義仲は大軍を追っ手として差し向けたが、兼康はわずかな手勢を率い「ササノセマリ佐佐迫(篠の迫)」の城にたてこもりこれを防いだ。しかし、奮戦かなわず落ちのびる途中戦死した。

ここにでてくる佐々迫の合戦のシーンに、「福輪寺阡」あるいは「福隆寺縄手」の名が登場する。この福輪寺縄手は、後に詳しく触れるが、中世山陽道の一部と考えられており、現在の岡山大学津島キャンパスの辺りにあったと推定されている。また佐々迫の城は、文中の「フクリンジノチマタ福輪寺阡を堀掘切て、ヒシウエヤカモ ギヒキ管植逆母木引きなどして、馬も人もカヨイガタ カマヘ通難く構たり。」という記述か

ら、中世山城のような城郭というより、阻塞のようなものと想定されている。因みに、この部分の記事なども参考にして、城郭史研究においては、平安時代末から鎌倉時代の城は阻塞とか切岸のような単純な施設を指し、鎌倉時代末から南北朝時代になってはじめて中世山城のような城が成立すると考えられている。

周囲の景観を文中から復元すると、福輪寺縄手の北には陰しい半田山山塊がそびえ、南には一面水田が広がっていたようだ。水田は沼田と表現されていることから、湿地状の土地と思われる。佐々迫北側の津高郷の谷口は沼地が多くあったらしい。

②『太平記』

『太平記』には、関連する可能性がある記事が2箇所でてくる。1つは、巻16「西国蜂起官軍進発事」の条、足利尊氏が九州におちのびた後の足利勢の巻返しの様子を述べた部分にでてくる、「備前には田井、飽浦、頓宮、松田、福林寺の者共、石橋左衛門佐を大将として甲斐川、三石二箇所の城を構へて船路、陸路を支えんとす。」という記事で、もう1つは、巻38「諸国宮方蜂起事」の条、山名時氏が備前・備中に侵攻した時、備前の諸将が城にたてこもったまま戦わなかった事を記した文中の「其の国の守護勢、松田、河村、福林寺、浦上七郎兵衛行景等…(略)…」の一文である。

このなかに「福林寺」氏という豪族の名が見られる。「福林寺」は「福輪寺」と同音であるし、後に述べるように、妙善寺の西隣には「福林寺」という字名が実際存在する。このことから、福林寺氏は、津島周辺を根拠地にしていた可能性が高いといえよう。

③『中国兵乱記』

『中国兵乱記』は、元和元年(1615)、中島元行が自己の体験した合戦とその功績を著したものである。したがって、自己の活躍を誇張する傾向や、記憶に頼っているので不正確な部分もいくつかある。しかし、実際に現場に居合わせた人物の書き残したものとして、その資料的価値はかなり高いと思う。

さて、津島周辺の様子がでてくるのは、「明禅寺合戦」に絡む部分の記述である。これは作者の初陣の合戦で、年少だったこともあって、永禄10年(1567)のこの事件を永禄7年の龍の口山城をめぐる合戦と混同している。だが、その内容は詳細で多くの固有名詞がでてくるので、津島近辺の状況がかなり詳しく想像できる。

備中を出陣した三村軍は三隊に別れて、明禅寺山城、国府村方面をめざしたが、元行はそのうち半田山南麓を進んだ隊に属していた。隊の先行部隊が旭川を渡った頃、元行はちょうど津島の辺りを進んでいて、後方部隊の裏切りにあった。その時の元行と他の諸将の奮戦ぶりが詳しく描かれている。

その文中に、「福輪寺の要害」、「妙善寺の砦」、「笹瀬山の城」、「津島七右衛門の要害」、「羽

武山の峰の要害」などの5つの城あるいは居館と考えられるものが登場する。それぞれが現在のどこにあたるかは、烏山城と考えられる「笹瀬山の城」以外確定はできない。また、「津島七右衛門」や「津島孫兵衛」などの人名が見え、津島辺りを本拠にする豪族と思われるが、具体的な人物像は明らかでない。ほかにも、「羽武の峰の尾崎」、「福輪寺山」、「福輪寺の首塚」、「津島村千騎谷」という地名が現われる。

半田山南麓の字名（図3）

地名の調査にあたっては、本来地籍図などによった綿密な手続きが必要なのだが、今回は、岡山市役所資産税課にある、地押図と地番図によった。まず地押図で地名を調べ、地番を比較して現在の地番図と照合し、それと都市計画図を重ねて、地形図に地名を投影させた。

今回の調査の結果でもっとも注目すべきは「城」という地名だろう。立地からいって、山城に由来するというより居館に関係すると考えられる。後でも詳しく検討するが、その位置からして、半田山城と関連する居館の可能性がある。

つぎに目立つのは「常円寺」、「勸祥院」、「寺屋敷」、「法京寺」、「福林寺」、「十乗坊谷」など寺院に関係すると思われる地名が多く存在することである。「福輪寺」が常円寺から十乗坊谷にいたる場所のどこかにあったことをうかがわせる。

まとめ

以上、測量成果、周辺遺跡、文献、地名など、半田山城に関連する事柄をみてきた。以下では、これらを総合的に検討しつつ、半田山城の縄張り、福輪寺縄手、居館をめぐる諸問題について若干の見通しを述べてまとめにかえたい。

①半田山城の縄張り

測量図をもとに半田山城の縄張りについて考えてみたい。縄張り図は城郭研究にとっては最も基本となる資料であり、復元模式図としての側面と略測図としての側面がある。未実測の城の場合は、踏査によってその二面を同時に表わさなければならないが、測量図が存在する場合は、復元想定図と考えていい。したがって、ここでは縄張り図の作成を以て縄張りの復元にかえたい。

縄張り図を作る前に、今までの半田山城の縄張りに関する諸説を紹介する。

最初の縄張り図らしきものは、津高郷土会の略測図である(図4)⁽⁹⁾。城名は戸月城あるいは都月城とされているが、周囲の状況から、現在の半田山城を指すようだ。この図では、城は4段の長方形が重なる形で示されている。大胆に模式化した図だが、実際の形態からはまったくかけ離れている。堅堀等の施設については言及していないが、井戸は、北側山麓に想定している。



図3 半田山麓字名図 (縮尺1/7500)

ついで、『岡山市史』政治編⁽¹⁰⁾に「半田山の城」として紹介されている。7段の連郭式の城と考えており、大体现状の形態に近いが、最西端の腰曲輪が描かれていない。竖堀等の施設についての言及はない。このころは曲輪以外の施設についての認識がまだ弱かったと思われる。

『日本城郭大系』第13巻は図面が示されていないが、縄張りについては『岡山市史』政治編を基本的に踏襲している。単純縦列連郭の配置から、戦国後半まで下るものではないと時期比定している。

以上の先行研究を参照しつつ測量結果から縄張りを想定してみよう(図6)。

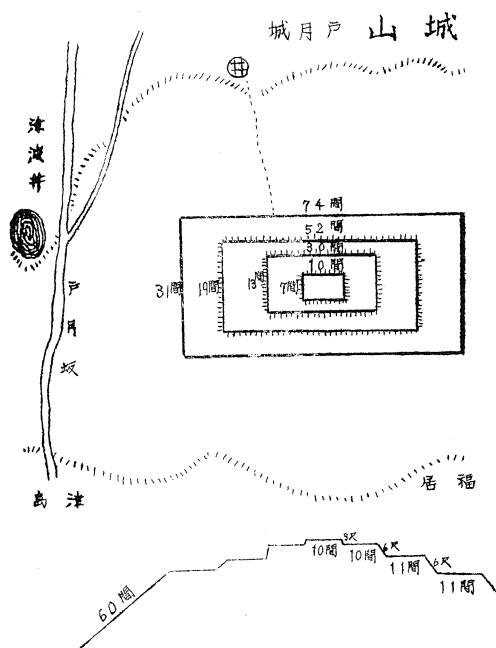


図4 半田山城 略図(1) 註(9)文献より

上記3者とも本丸と考えている頂部の高まりは下段との比高差もほとんどなく、独立した郭とは捉えられない。また西第2郭と西第3郭も本来は同一の郭とみて、主郭と、東に1郭、西に2郭の4段からなる連郭式山城と推定する。さらに、東・西第1郭が上段の犬走り⁽¹¹⁾と連結し、西第2・3郭と下段の犬走りも連結して、最西端の腰曲輪とともに3重に主郭をめぐる構造になっていたと思われる。竖堀は3条のみで、尾根筋にも堀切が確認できないが、これだけでは防御施設としての機能が弱く、埋没してしまった可能性が考えられる。水利施設はまったくわからない。年代は、『日本城郭大系』をこえるような成果はあがっておらず、戦国前期以前としかいえない。

②福輪寺縄手

石坂は報告の考察のなかで、とくに中世山陽道との関係を重視し、交通の要衝に占地する城と位置付けている。⁽¹²⁾つまり、半田山周辺の中世山陽道に該当すると考えられている福輪寺縄手と、半田山城がどういう関係になるのかが大きな問題となろう。

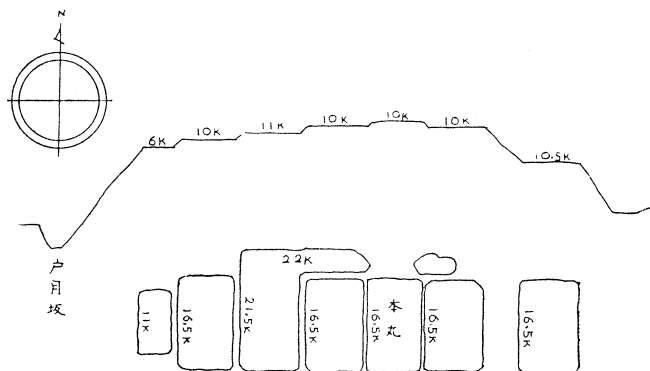


図5 半田山城 略図(2) 註(1)文献より

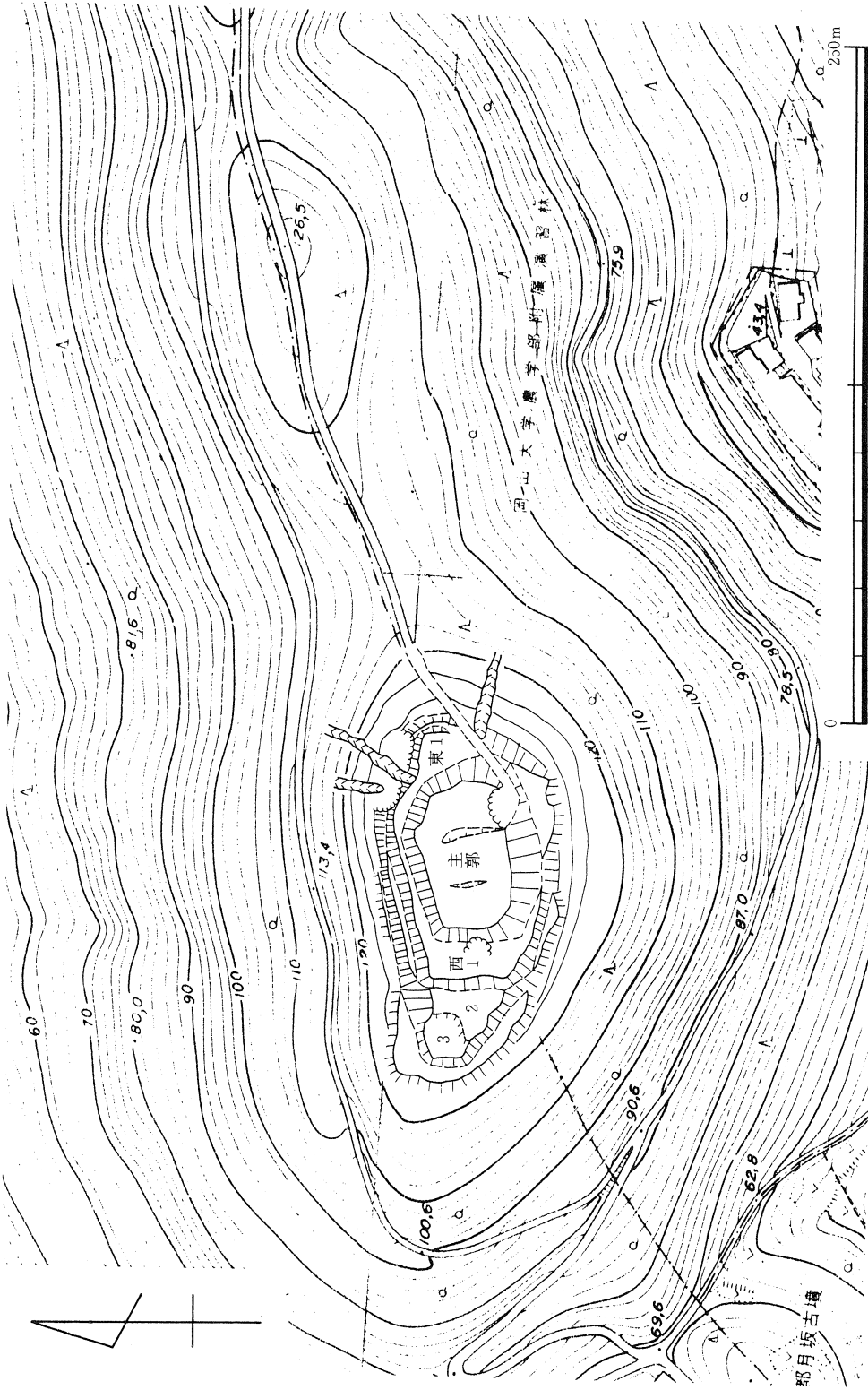


図6 半田山城縄張図 (縮尺1/2500)

福輪寺縄手がどこにあったかは福輪寺の所在地とかかわってくる。『岡山市史』古代編では、福輪寺が日蓮宗に改宗して妙善寺と改めたときに市場の辺りに移転し、その跡が末寺として常円寺になったと推測している。⁽¹³⁾「寺屋敷」などの地名をその証拠としてあげている。現時点では、それを否定する材料も肯定する材料もないが、寺院に関係する地名は市場や西坂の周辺に多く分布しており、その中のどこかに福輪寺の中心があり、一帯に広く寺域を構成していたと考えておきたい。

つぎに古代の計画古道や条里制から推察してみよう。

足利健亮は、福輪寺縄手を、国府の真ん中を横切る直線道の続きと推定し、図面からみるかぎり、現在の岡山大学津島キャンパスの北辺を走る道をその名残とみている。⁽¹⁴⁾しかし、この道は平地を横切る計画古道としては蛇行しすぎており、また、『源平盛衰記』や『平家物語』の記述からすると、道の左右は水田と思われるので、山裾を走るこの道はふさわしくない。

御野郡の条里の方向は、国府付近の条里の方向と一致しており、国府を横切る直線道は条里の一部をなしている。⁽¹⁵⁾したがって、福輪寺縄手もその条里ライン(E-F-G)に沿って走っていた可能性が強だろう(図2)。岡山大学津島キャンパスでは、男子学生寮予定地および工学部生物応用工学科棟予定地の調査で、まさにその条里ラインにそった大規模な溝が検出された。⁽¹⁶⁾その溝の脇に1.5～2 mの間隔を置いて平行して走る幅2～3 mの溝がある。高重進は2つの溝にはさまれた部分を道と捉えて、これを福輪寺縄手と推測している。⁽¹⁷⁾しかし、出土遺物から、この条里の溝は平安時代前半を中心とした時期に機能していたと思われ、平安時代の末まで下るかどうかは今のところわかっていない。男子学生寮予定地では、その上層でも同じ位置に幅広の畦畔が検出されており、それが福輪寺縄手に相当する可能性があるが、時期が確定しておらず断定はできない。正式な報告書が出るまではどちらが妥当かの判断はつきかねる。いずれにしても、E-F-Gライン上に福輪寺縄手があったことが推測される。

③居 館

半田山城は有事籠城型山城であり、それに対応する日常生活の場、居館がどこかに存在したはずである。⁽¹⁸⁾居館と山城が必ずしも近接するわけではないが、半田山城が比較的小型の城であり、その支配領域はそれほど広くないと思われるので、居館は麓付近にあった可能性が非常に高い。

最も有力なのは、先述のように「城」地名が残る地区である。ただし、ここは、半田山の南斜面が麓近くで傾斜をゆるめ、なだらかに南にのびた低丘陵の、東側の一段低くなった平坦地に相当する。水田地帯よりは少し高くなっているが、あまり適した場所とは言えない。むしろ、西に接する「勸祥院」の辺りが最適ではなかろうか。現状ではここに居館跡を想定しておく。

半田山城が都月坂を見下ろす交通の要衝に位置することは否定しがたい事実だが、都月坂を

押さえるための城かどうかは検討を要する。在地の小領主単独の力で幹線道路である山陽道の一角を押さえるのは不可能に近い。それを維持するためには、かなりの広域を支配するような有力国人や大名の戦略的展望が必要である。そのような城⁽¹⁹⁾にしては半田山城の規模は小さすぎる。また、郭の規模などから考えて、常時兵が駐屯し通行する物資、人間を上から監視して、流通を管理していたとも考えがたい。そういう機能は居館のほうに求められるべきだろう。

居館の位置を「勸祥院」と仮定すると、先に推定した福輪寺縄手が、都月坂にむかって屈曲しつつ上っていく、その入り口にあたることになる。つまり、中世山陽道の交通の要所に立地しているわけである。開発領主としての性格から、水利の管理に有利な場所に居館が位置していることが多いが、流通を管理することを重視した領主も存在した可能性があり⁽²⁰⁾、この場合はそれに相当するのかもしれない。市場という地名がまわりに広がっているのも、そういった性格⁽²¹⁾をうかがわせ興味深い。

以上、長々ととりとめのない話をつづけたが、筆者の未熟さゆえ、全くまとまりのない内容になってしまった。測量調査を担当し、かつ、日頃からこのような問題について熱心に研究されていた、石坂氏が本来執筆すべきところを、氏の転出によって急遽私が担当することになったため、泥縄の感は否めないが、なにとぞご容赦願いたい。

本文を執筆するにあたって、角田茂、出宮徳尚、久野修義、石坂俊郎の各氏には貴重なご助言・ご指導をいただき、また、近藤義郎、高重進、新納泉、山本悦世、絹川一徳、若林卓、大橋かおりの各氏からは多大なるご助力を得た。末筆ながら、記して感謝したい。

註

- (1) 巖津政右衛門 1964 「第一編 中世 第六章 岡山平野の豪族たち 二.市域にある城跡」『岡山市史』政治編 巖津政右衛門編
- (2) 出宮徳尚 1980 「岡山県 半田山城」『日本城郭大系』第13巻 広島・岡山 西本省三・葛原克人編 新人物往来社
- (3) 新納泉・石坂俊郎ほか 1990 「半田山城跡の測量調査」『都市近郊林(半田山)の自然特性およびその環境保全機能に関する研究(Ⅳ)』平成元年度岡山大学教育研究学内特別経費研究成果報告書
- (4) 巖津政右衛門ほか 1968 『富山城跡第1次調査報告』岡山市教育委員会
巖津政右衛門 1969 『富山城跡第2次調査報告』岡山市教育委員会・水内昌康ほか
- (5) 一般に「福輪寺縄手」と俗称されており、本文でも支障のないかぎりこれを用いる。
- (6) 山本悦世ほか 1988 『鹿田遺跡Ⅰ』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第3冊 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
山本悦世ほか 1990 『鹿田遺跡Ⅱ』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第4冊 岡山大学埋蔵文化財

調査研究センター

- (7) 出宮徳尚 1985 「岡山市二日市遺跡」『日本考古学年報』35 日本考古学協会
- (8)A 松岡かおり 1987 「2 発掘調査 ①学生部男子学生寮改築に伴う発掘調査(津島北地区AV00・01区)」『岡山大学構内遺跡調査研究年報5』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- B 土井基司 1989 「2 発掘調査 ②工学部生物応用工学科校舎新営に伴う発掘調査(津島北地区AV・AW04・5区)」『岡山大学構内遺跡調査研究年報6』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- ただし、畦畔ではなく畝状遺構が検出されており、畑の可能性もある。
- (9) 青井若太郎 1941 『史蹟及び古蹟』横井村誌十輯之内第五輯 津高郷土研究会
- (10) (1)文献に同じ
- (11) (2)文献に同じ
- (12) (3)文献に同じ
- (13) 巖津政右衛門 1962 「第六編 平安時代 第一章 平安時代の仏教 四. 福隆寺跡」『岡山市史』古代編 巖津政右衛門編
- (14) 足利健亮 1974 「吉備地方における古代山陽道・覚え書き」『歴史地理学紀要』16号 歴史地理学会
- (15) 石田 寛 1962 「第四編 岡山市域の条里」『岡山市史』古代編 巖津政右衛門編
- (16) (8)A、(8)Bに同じ
- (8)A報告文中では河道として認識されているが、規模、形状、位置からみて、(8)B報告の溝と同一の溝と考えるのが妥当だろう。
- (17) 高重 進 1990 「第2章 吉備と律令体制の成立 第4節 山陽道」『岡山県史』第三巻 古代Ⅱ 岡山県史編纂委員会
- (18) (2)文献に同じ
- (19) 出宮徳尚氏のご教示による。
- (20) 久野修義氏のご教示による。
- (21) 城館と市場の有機的関係は、地名考証などから指摘されている。
- 谷重豊季 1989 「中世加賀・能登地域における「町」についてー歴史地理学のアプローチー」『金沢大学文学部地理学報告』第5号

参考文献

- 『岡山市史』政治編 1964 巖津政右衛門編
- 『岡山市史』古代編 1962 巖津政右衛門編
- 『日本城郭大系』第13巻 広島・岡山 1980 西本省三・葛原克人編 新人物往来社
- 『岡山市埋蔵文化財分布地図』1983 岡山市教育委員会
- 『岡山県史』第三巻 古代Ⅱ 1989 岡山県史編纂委員会
- 『岡山県史』第四巻 中世Ⅰ 1989 岡山県史編纂委員会
- 『岡山県史』第十九巻 編年史料 1988 岡山県史編纂委員会
- 『源平盛衰記』『平家物語』『太平記』はこれによる。
- 『新釈備中兵乱記』1987 加原耕作編著 山陽新聞社
- 『中国兵乱記』はこれによる。
- 『岡山県の考古学』1987 近藤義郎編 吉川弘文館
- 『土木』講座・日本技術の社会史 第六巻 1984 甘粕健ほか編集 日本評論社